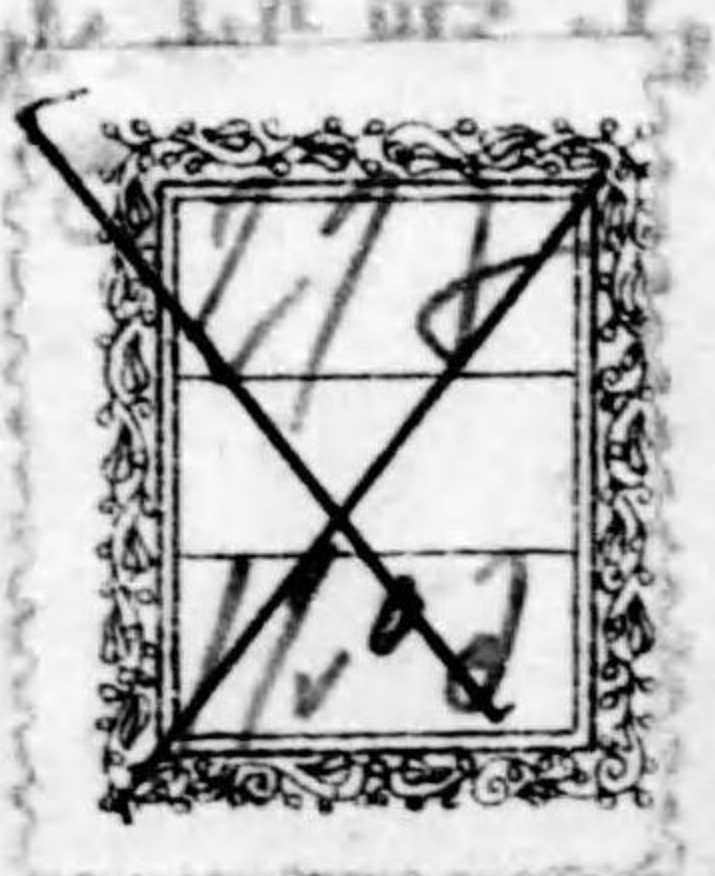


特100

145

血証

著



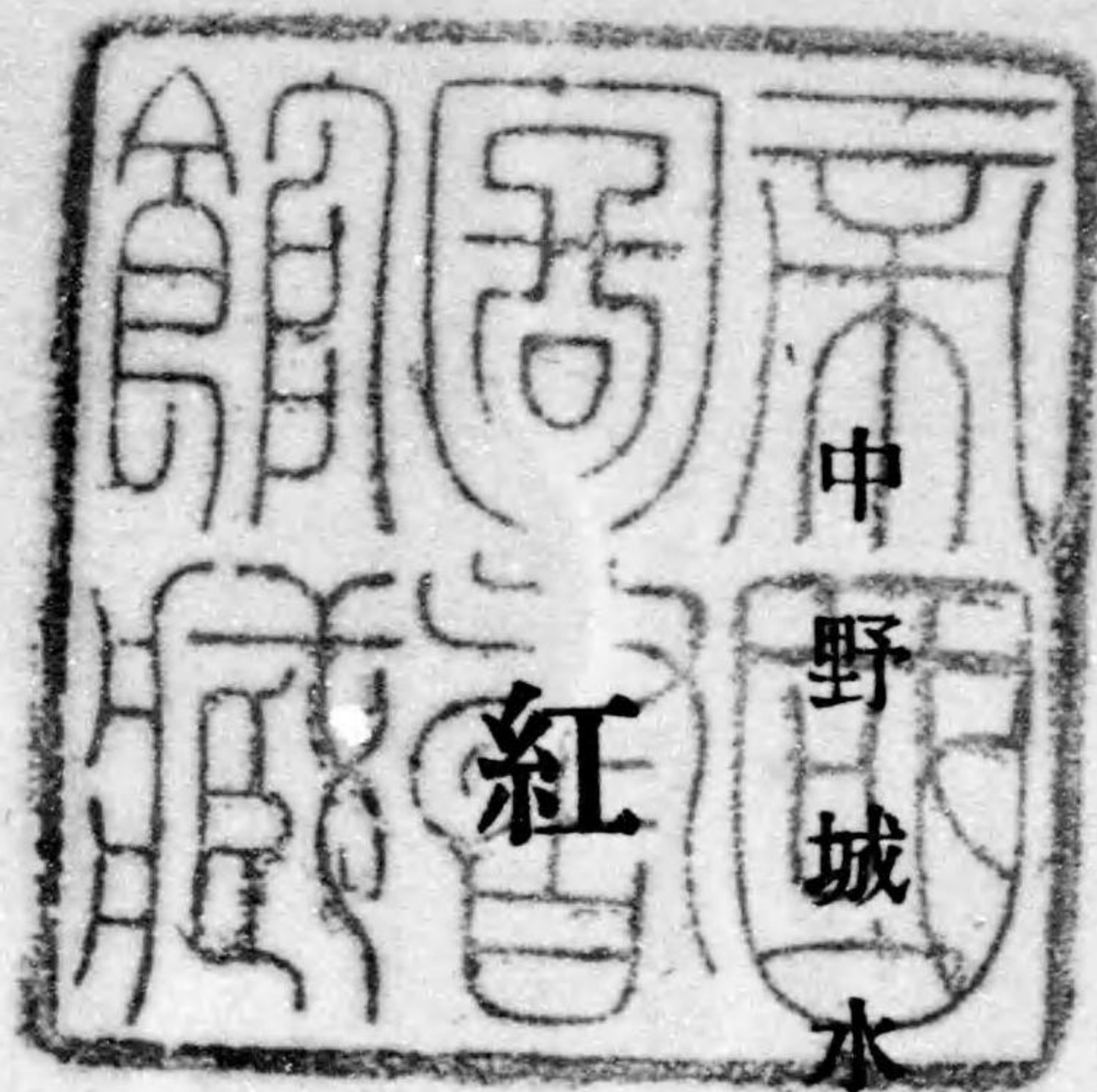
始





特100

145



著

皿





はしがき

逝く春や紅の盡きたる繪具皿——

芳醇の香をたゆたはせ、華かな紅の衣に包まれた若い春の姿を蝶々のごとあこがれまはつた軽い疲れのうたゝ寝。其の甘い夢の覺めやらぬ間に世はもうすがくしい緑の夏の姿に着更へてゐた。其のわどろき——其のかなしみ——「紅皿」は其の私のはかない春のかたみであつた。



目次

春の姿	一
庭の梅	一
春の野	一
春の小川	二
櫻狩	二
籬根の桃	三
逝く春	三
春の思	三
梅の句	四
陋巷生活	七
吾が家	一



千鳥啼く濱……………一五

巖頭の乙女……………二九

旅のロマンス

木曾の一夜……………三一

鳥井峠……………三九

代々木の夏……………五二

澁川の宿……………六七

Tさんへ……………七四

焼芋……………七七

をけさ踊の名人……………八〇

聲の可いS君……………八二

變な男……………八五

旅の手帳の中から

海府浦の勝……………八八

野宿……………八九

日光での喜劇……………九二

藤峠のお神さん……………九五

支倉常長と林子平の墓……………九八



紅 皿

春の姿

◇庭の梅

庭前の梅花既に綻び初めて清香浮動し、日はまた温き光と色を送り來つて、  
世は初めて春の來れる心地す。鶯は未だ谷に籠りて空をや窺ひ居らん、今日  
は姿見せん明日は來て啼かんさ、獨り窓に身を靠らせて待ち詫ぶるもまた儂き  
頼なり。

◇春の野

霞たなびき、陽炎燃ゆる春の禱の濃き野邊、雲雀天に舞ひ、菜花十里目も遙か



なる黄金の波に胡蝶相追ふ。里の少女の相和して長閑に唄うたひ行くも、瓢提  
げて杖曳く老人も、皆春の姿にあらぬはなかるべし。

◇春の小川

溶々として流れ行く春の小川の水は澄みて底の小石も数ふべく、鮎の時々白き  
腹をロラリと光らせて遊ぶ様も可愛らし。摘みて野芹を洗ふにや、燃ゆるばか  
りの紅裙に雪の如き白き脛を露出して、岸に蹲踞れる少女の姿の清くさも亦美  
しきことよ。

◇櫻狩

毛氈を敷きて花を肴に一杯一杯また一杯。花は語らずさも散りて杯に舞ひ來り  
酒と花とを合せ飲まんもまた何等の風流ぞや。「花に暮れて我家遠き野路かな」  
花に暮れても酒には暮れず、酒に暮れても唄には暮れず、花諸共に飲みし芳し  
の陽より迸り出づる花の如き美しき唄の淡靄に幽かに暮れ行くもまた春の景色

也。

◇籬根の桃

春を外にし籬根に眠る小犬や何をか夢見らん、泉水の流れ入る竹籬の中に燃ゆ  
るばかりの桃の花の咲き亂れたる、うも何人の住居にや。「十七の母ある家や桃  
の花」春の情の濃なるは桃の花なり、春の姿の艶なるは桃の花なり。あゝ、若  
き十七の母の情や如何ならん、姿や如何ならん。

◇逝く春

鶯老いて緑は益々濃に、燕は雨より渡り來つて日は益々暖に、三春の行樂將に  
盡きんとす。庭前の櫻花ろも何處にか散りし、花に戯むれし胡蝶今何處にか行  
きし。「逝く春や紅の盡きたる繪具皿」あゝ、世は已に夏近し。

◇春の思

春雨蕭々として野も山も墨繪の中に暮れかかり、遠くに鳴く牛の音も春の日永



に厭きたるらし。あふ、物思ふにふさはしきは春雨烟るソかな。思へば三春花  
間に放吟し、嘆詠し、憧憬せしも夫れ唯一瞬の夢にてはあらざりしか、春逝き  
花散りてまた來ん春に同じ姿は迎はんも、吾に既に一年の老あるを如何にせん。  
花に永久の色あらんも吾に百歳の壽無きを如何にせん。

梅の句

梅が香にのつそ日の出る山路哉

芭蕉

一笠孤杖朝露を踏んで嫩草萌は出づる山路を辿る、爽快己に想ふ可き也。況や  
淺緑を點綴する梅花の、馥郁たる清香漾ひ來つて吾鼻をうつに於てをや。況や  
又朝暉團々眩きばかりの光彩と希望とを吾と花とに與ふるに於てをや。あふ、  
此好詩境豈芭蕉ならずと誰か詩情の動かざるものあらんや。

梅が香や覗けば谷に家もあり

關叟

春山上の眺望程世にも心行くばかりのものあらんや。其心行くばかりの眺望に  
耽るの時、清香春風に浮動し來つて人の袂を打つ。驚き下瞰すればも何人の  
住居にや、草廬床しき處梅花今を盛と咲き亂れあらんきは。武陵桃源とやらも  
かくやとばかり思はるゝ也。

梅遠近南すべく北すべく

燕村

花信類に至りて風流子家に籠るの情に堪はんや。一瓢を腰にして今日は此處、  
明日は彼處と探梅に日も亦足らざるも春の情也。途を迷ふて梅ある所はと聞け  
ば里の少女の答へずして唯森ある寺を指すも可愛らし。野鶯の聲をしるべに連  
らんもまた梅への吾心盡しなるべし。

病僧の庭掃く梅の盛りかな

曾良

盛りさはいひ百花の魁と謳はるゝ梅の花時は、寒氣尙稜々人の肌に迫るものあ



り、此時此僧病あり、白衣墨袴帯を手にして凍々しくも潔くも咲き亂れたる花  
下を掃き清む。其處に人生の悲哀を語り、此處に幽寂の曉鐘響く。

園の梅散るや火の無き煙草盆

子 規

花散りては鶯も來らず、日毎に訪ね來りし風流子また何處にか行きし、赤き毛  
氈を掛けある床几の煙草盆。徒らに火の如き思もて待つも思は灰になりて、遂  
に待つ人の來らざりしを如何にせん。

梅散るや京の酒屋の二升樽

燕 村

翻々として花葩天に舞ひ散りて行樂の夢將に醒めんさす。酔を買ひし京の酒屋  
の二升樽餘瀝夫れ幾何ある。持ちて横に振りし酒屋の主婦の驚異の眼を睜るも  
面白く、散りし花に殉ぜし酒樽の姿の床しきも亦床し。

瘦梅や醉藏の陰に二三輪

几 董

卅に容れられずして草蘆を結ぶ清節の士とも思はるゝ也。櫻花に濃艶あり、梅

花に清韻あり。彼は人をして恍惚たらしめ、此は人をして靜寂たらしむ。況や  
醉藏の陰に咲く二三輪の梅花の、淋しくもまた哀なる姿を見ては何人か或感に  
うたれざらんや。

陋巷生活

郊外の寓居を追はれて巷閭に移りてより茲に二ヶ月。好晴數日ならずとも黃  
塵室に漲り、風雨數時ならずとも屋根漏り水床下に浸る。頑是なき我が子の桶  
よ馬穴よと騒ぎ興する様見ると可愛らしくも悲しき親の心。金殿ならず玉樓な  
らずとも、せめて風雨凌がれ体に障りなき家なき、吾幾度子故に泣きしことぞ。

秋夜電燈華々たるの下、机に凭りて筆執らんさすれば、窓外の若滿津樓の絃  
歌喧然として吾が詩興を破り、筆を投じ床を伸べ寢に就けば新聞社の時鐘の音



惻々として吾が枕頭に到る。あゝ吾淺度か世を思ひ、親を思ひ、妻を思ひ、子を思ひて人知れぬ涙に枕を濕うせしぞ。

吾此の家に移り來りてよりなどて斯くは不幸不運の數多きことぞ、家低くして濕氣多き爲め、妻は脚氣を病み醫藥に親めども癒はず、儘よ物は試しよ一つ灸を据わては如何にその母の勧めにより、或灸を据わる女を招びて依頼せしにこは如何に、妻に髪を解き亂させて其の頭の頂にブス／＼据わんさば。吾妻の脚氣を頭痛に病むにはあられども、こは余りに荒療治、吾即日中止を命ぜり。藥も駄目なり灸も不可なり、しかも病氣はいや増に募るばかり、然らず轉地させんにはと、妻は天高うして氣澄めるの秋の日曜の朝、二子を連れて彼の里へと行けり。

家庭に子供無きは花壇に花無きが如きもの、如何に其の荒涼蕭條たる、而も搗て加へて母は下痢を催うして苦しむこと甚しく、ヘルプよ胃腸丸よと吾一

人悲み憂ふ其の心の苦しき。

斯く災厄の續出するは家相の悪しき故なり、移轉し給へど親切に忠告し呉るゝものあり。世に家相や方角の善悪などのあるびうも思はれど、斯く言はれて見れば成程居心地宜しからず、其の宜しからざるが即ち家相の悪しきならんこと吾漸く他に家を求めんと決心せり。

親類知己の多からざる吾、幸に吾を舊師として訪ひ來る者に良き家は無きやあらば聞かし給へど頼めば夫等の者親切に彼家此家と心配し呉るを、轉てや口性無き世の人、吾の依頼せる者の多くは妙齡の婦女なるより種々の噂を言囃さんさば。

思へば吾は余りに卒直なる男なりき、余りに開放の男なりき、卒直は時にペテンに掛り、開放は時に誤解を招く、若かず吾も隱微に詭詐に、偽君子の假面を蒙らんものと思はざること無きにあられど、この偽る能はざる天性を如何に



すべき。余の且つて教へし婦女吾を評して、漱石の「坊ちゃん」に酷似せる點甚だ多し。ああ吾も彼の坊ちゃん如く世に容れられずして終るか、坊ちゃんは人に容れられざるも悠々自適洒々落々たりき、若かず吾も偽の世に容れられずとも吾は吾この性を矯めずに通さんには。

吁懐しきは郊外今朝白の生活なりき。前庭の五葉松は亭々として天を突き、綠影我書齋に落ちて趣致言ふ可からざるものありき。松樹の下に吾花壇を作りダリヤ、コスモスを植うれば、妻は後庭に下りて胡瓜、茄子を植う。ダリヤ、コスモスの如何に吾が家庭を樂ませしこそぞ、胡瓜茄子の如何に團樂の樂みを増さしめしこそぞ、時に妻子と栖吉堤上螢を追ひ、時に子供を連れて田に目高を掬ふ。碧空は際涯なく連りて白雲搖曳し、清風稻田を渡つて、田草取る娘の唄鈴よりも涼し。

吁人の心のたのみ難きに似ずして永久に變らぬものは自然の姿なり。吾性愚

にして世と相容れず、浮世はうき世にて住み憂きが中にひそり自然吾を容る、明月吾を照し清風我を吹く、吾自然の大觀に俯仰して感謝と涕涙を捧げしるも幾度ぞや。

彼を思ひ景を思ひ、吾此の陋居に呻吟す、頃日故ありて吾筆を創作に絶つ、

孤獨寂寥、鬱勃たる磊塊も何によりてか漏さん。

搜さん哉搜さん哉郊外の家、求めん哉求めん哉郊外的生活、其處に自然の慰藉あり家庭の團樂あるものを、筆を投じて吾物思ふて茫然たるこそ多事……。

吾 が 家

寺の大門鬼が住み、墨校の門前野人巢くふ、吾其の矛盾の苛責を嘯き居るも心中忸怩たらざるを得ざる場合の少なからざるを。



吾楊子啣いてタホルアラ下げ前庭に降るの頃、師範の生徒既に朝飯を済まして今を懸命に風琴弾き、垣に居並ぶ雀等賢しくも朝の囀を済ましたところ云はぬばかりの面構、日は既に師範の屋根に昇つて眩きこと夥し。

其の眩き陽に吾が満庭の草木生々として朝風に戦き、綠影躍つて吾が寢惚眼に滲み來る。

吾が庭狭けれども梅あり櫻あり椿あり棗あり。薔薇あり芍薬あり菖蒲あり菊あり。嚴冬六花の枝に來り咲かば春夏秋冬夫れ花に離るるの時なし。

椿の落花を糸に綴りて餘念なき操、椿振上げて水陸に蛙を追ふ茂。頑是無き吾が子等の嬉戯する姿の親には花に優る花の姿。相手に共に遊ばんには吾も亦子供に若返れるの心地するをや。

吾机に向ひて書を綴れば操、茂の二人吾が側に侍りて幼年書報にエバナシを繙く、吾筆執りて紙に向へば彼等亦へへののもへじなものす。一舉一動摸倣を

生命とする子供の行末を思へば、吾の餘りに放縱不遜なるに汗すること夫れ幾度ぞや。

累々として生れる梅の實を棒もてもぎ落せば子等は狂喜して拾ふ。拾ふは宜し其處に争の起きるを如何にせん。三つの茂八つの姉を泣かして意氣軒昂。操また怒つて復讐す。吁彼等未だ相讓ることを知らず、人間にして教育を施さずんば夫れ猿と選ぶさころ無けん。

惟ふに吾は忙しき身なる哉、職務は職務として趣味餘りに廣し、讀書可し、文筆可し、テニス可し、ベース可し、碁可し、かるた可し、何んでもかでも御座れ主義の以外に自然に憧憬るゝの甚しきをや。而も下手の横好き何れも是も物にならず、吾幾度筆を折らんせばせし、幾度ラケットを捨てんせばせし。而も意志弱き吾は尙も感情に引摺られて居る其の意氣地鈍さ。

日曜は吾の安息日なり、遊樂日なり。妻子と遊ぶか、弟子の訪問を受くるか



或は運動するか、或は一人飄然郊外を逍遙するか。吾この一日は俗事に寸時も思を致さざらんことをこれ願ふ。

吾長岡に來りて茲に五年、今朝白に住み、さいちん小路に移り以て現在に到る。水草を逐ふにはあられども幾多の俗因一處に止まる能はざらしむ。入口を開けば衣食住と云ふ、然れども吾をして云はしむれば寧ろ住・食・衣と云はん哉。衣は美ならざるも垢つかずば足るべし、食は美なるを欲せざるにあられど、粗食豈堪はずとせんや。若し夫れ住に至つては四邊こせつかず、庭美しく畑廣く縁長く窓明るき家をさ。吾其の願今朝白に於て最も達せられ、現在まづこれに次ぐ、若し夫れ吾の理想の住居に至つては吁夫れ何の目にか求むるを得ん。

千鳥啼く濱

二人が停車場へ降りた時には短い冬の日は先刻に沈んでしまつて、人の哀愁を唆るやう。冷い淡靄の彼方此方に客を招ぶ宿屋の番頭の皺噎れ聲や、車夫の請ひ纏るばかりない聲が五月蠅いまでに忙しなく入亂れてゐた。二人は夫等に目も與れやうともせず力なげに肩をすばめて歩いた。

二人が長い橋の袂へ來た時には川向の街には明い瓦斯や電氣の燈が一杯に輝いて其光が溶々と流れ行く廣い川面へと落ちてゐた。海の方から吹上げて來る潮風は頬を削るが如き辛味と凄味さを持つてゐた。

「オ、寒いこと」

さ、女は男の側へと驅け寄つた。



「中々寒いネ」

と、男は女を擁ふ如うに摺寄つた。

インパネスと吾妻コート……何箇もなく橋の欄干に燈された電氣の光で二つの長い影を引いて明い街の方へと渡つて行つた。

橋を渡り終ると其處には交番があつた、交番には一人の巡査が立つてゐて今しがた着いた汽車からの人を一々猜疑と邪推の眼で睨んでゐた。二人は何んだか自分等の此度の事が早や此の街へまで探索の報知が来て夫れで彼等に吾々を睨んでゐるのであるまいかこの恐怖に慄れた。

交番の前をダラノと降れば兩側には柳の並木が續いて其並木を透うして瓦斯や電氣で眩い商店には蓄音機を鳴らして客を招んでゐた。處々に渠溝があつた渠溝には必ず橋があつた。二人は沈黙の儘街を歩み橋を渡り見も知らぬ人の視線を此の上も無い苦當と恐怖とに覺わながら歩いた。

「何處か餘り眠かでない旅館へ泊りたいワ」

「さうだね、まあこの通を進んで行つて見やう」

と、二人は相も變らず力なき歩を柳垂る堀に沿ふた街に運ばせた。

「此家は良ささうぢやないか子、静で、あまりに客も無いらしいが」

「ほんにネ、此家にしませう」

二人は格子戸を開けてセメントで固めた土間を奥へと進んで往つた。帳場に控へてゐた番頭は

「いらつしやい」

と、疊を滑り出て挨拶した。二人は其聲の高きにまたも自分等の心の暗きに慄れた。



下女がね風呂は如何ですき二人の座敷へ伺ひに来た。

「お前先入つては何うだい、寒がつてるぢやないか」

「貴郎まあ先へ」

「うんなら二人で入らう」

女は懐中鏡を出して桃割を梳いてゐた。うして

「妾一寸此處を直してから」

と、玉の如うな手を赤い緬縮の袖口からスラリと出して弄つてゐた。男は只立つて女の蒸氣に出た髪や白い頸足やしなやかな白い手の捌を惚然として眺めてゐた。

「ああこの美しい肉、優しい魂、夫れがこの街へまで慙うして滅しに来たのぢやないか」

と想ふと彼は俄に居堪らなくなつて思はず面を背向けた。

女は漸くに髻と鏡から手を離して男を振返つた。

「貴郎また考へて？」

女は覗くやうに男の顔を見上げた。

湯槽は余りに廣くはなかつたが夫れでも二人の体を容るるには十分であつた。

二人は湯氣の爲に電燈がぼかされてゐることは云へ、慙うして明るい世界に肉體と肉體とを觸合はせても其處に或る羞恥の起きぬまでに彼等は甘い秘密の世界から脱け出てゐた。

「一つ背中を流しませうか」

「さうだ子、これも此世での……」

と男は急に堪らなく涙を落した。女の白い纖い手が上下に優しく動いた。男は首を俛れた儘背中を投出してゐた。

湯から上つた二人は直ぐ夕飯を濟ませた。



「今頃抱主では大騒ぎしてませう子」

「然うサ子、だが豈夫二人が恚ういふ破目で仕方なくなつたなどは思つておやしまい」

「夫れは然うですさも……だが夫れだけ後で驚げることでせうよ」

男は黙つて手を火鉢に翳した、女も聽て手を火鉢に翳した、うして其白い纖い指で男の指を挿んだり撫でたりしてゐた、沈黙は永く續いた、天井に燈された瓦斯燈は凄いまでに青く二人を照らした、按摩の笛が寒い冬空に淋しく流れて來た男は思附いたやうに

「お前は本當に死んで呉れるかい」

「まあ……何を今更改めて……」

男は再び手を火鉢に翳した、女は翳した男の手を見詰めてゐた。

「果敢い因縁であつた子」

「然うでしたワ子」

二人の手と手とは固く握られた、沸々として沸き騰つ熱い血潮は互の手を通して二人の体に流れた。

三

朝二人の起きた頃には早や旭は障子に明るい光を投げてゐた、前の溝渠の柳には雀が頻りに囀つてゐた、柳には川船が繫がれてゐた。

二人は昨晚の事が今更夢の如うにも幻の如うにも思はれて吾も吾身が振り返り見られた、二人は幾度今夜ころは心にも叫んだことであらう、愚圖々々してゐては追手に捉つて終ふ、其時は何の顔下げてまた再び二人は店主に抱主に逢はれやう、

「ッ今夜だ、今夜、ころッ」



と、二人は出立する時或次手を求めて買つて来た毒薬の包を擴げた時には、二人の眼は血走つてゐた、視線と視線……二人はまたも白い粉を見詰めて涙を流すのであつた。

「何んぞか生きる工風は無いものかしら」

「お前は死ぬのは厭なのかい」

「イエ、妾が何んで。只死なずに添はれれば尙結構だと思つて」

「何を今更……恁那破目になつて……」

「夫れはさうですワ子」

二人は其晩二人の前に置かれた粉薬を見詰めて自分等の來りし足跡を振返つて見たり、また是から愈々決行した後の事などが想像せられて折角覺悟した決心もまたも生存を欲する強い要求が全身に漲り來つて何うすることも出来なかつた。

「あゝ茲に二人を助けて呉れるものはあるまいか……」  
 と男は白い粉薬をまた手鞆の中へと收めた、女は背に涙を打たせてシク／＼と泣いてゐた。

「兎に角今夜は止して明日にしよう、金は何程あるい」

「まだ七圓あります」

「然う？」

二人は其儘床に就いた、夜着を蒙つた下からは男の嘆息が時々洩れた、女の嘔泣は永い間續いた。

今朝起きた時宿の女中が

「お早うムいます」

と挨拶しながら賢しげの眼で眺めた時には二人は昨晚の事が知れたではないかと思はれた。ろういへば宿帳書けに來た時の番頭の様子も二人には不安の思に



驅らせずにはゐなかつた。

「それでは長岡の方です子」

「ううだよ」

「ハイ、夫れで分りました」

番頭が階段を降りて往つた後に二人の眼と眼とを思はず衝突した、其處に二人は軋からぬ不安と恐怖の光を宿してゐた。

四

「旅館の二階では迎ても」

と思つた二人は其朝旅館を出た。

「今夜また厄介に来るかも知れないが……」

「何うぞお待ちしてゐます」

番頭の聲を後にして二人はまたも溝渠ある街を歩いた。

「お前金は早や二圓しきや無い子」

「ハイ」

「愈々決行だッ」

と叫んだ男の聲は余りに鋭かつた、二人は思はず四邊を見廻した、朝の柳の街はまだ眠から醒めぬが如くに静りかへつてゐた。二人は夜の來るのを待つた、自分等の愈々此世との交渉の斷ゆる時の來るを待つた。川と溝渠とに狭まれた公園のベンチに二人は二時間餘も沈黙の儘腰を却してゐた。甘い歡樂、苦しい逢瀬、無理算段、不義理、借金と追想は追想を追ひ、回顧は回顧を喚び、果は愈々この身を亡ぼさればならぬ現在に思ひ到つた時には思はず二人は抱合ふて離れ難い二人の魂を溶け合はせた。

「うこらへ上つて晝食でもとるか」



「欲しくもないけれど」

「だつて夜になるまで大分時間がある」

「然う、然うしませうか」

二人は徐々歩き出した、川面を渡り来る冷たい風は二人の淋しい姿を掠めて行く、公園の冬木立に圍まれた瓢池の中には噴水が冷げに騰つてゐた。二人は其池畔にある茶屋へさ入つて往つた。

五

時々流れ来る薄曇の如き雲は弱い冬の月の光を隠して互の顔さへ分らぬ程暗い、海から吹き来る潮風は骨を刺すかさまでに凄く荒んでゐた、砂濱に寄する北海の波は狂ふが如くに猛りに猛つてゐた、遙か港口の彼方には燈臺の燈が悪魔の眼の如くに光つてゐた。

女は男に手を曳かれて靜に歩いてゐた、空は益々暗く、風は愈々強く、涙は益々狂ふ。二人は愈々只二箇の生命を容るゝの地なきこの世と別ればならなかつた、沖には千鳥の啼く聲する。

月は雲を破つて出た、二人の顔は青く照し出された、男も女も臉を腫してゐた女の鬚は崩れて後毛が凄いまでに白い顔に振懸つてゐた、月はまた雲に蔽はれた。夜の幕は再び二人の姿を隠した。

磯に上げられる漁舟の陰に二人が体を並べた時にははや日和山上の團子茶屋の燈火も消れた頃であつた。

主人への不義理、親への不面目。戀の不成就。この苦惱、この煩悶、この艱難から二人を救ふべきものは只死。

月は永久に照し、雲は永劫に流れるであらう、風は永遠に吹き、浪は永久に荒れるであらう。而も二人の生命は今數分を出ですして永久にこの世界と別れ



げならぬ。

「お前愈々良いか」

「ハイ貴郎と一緒に彼の世へ行くのですもの」

「さうだ、良う云ふた、何んの未練のあるものか」

「サア一緒に入らう」

二人は猛り狂ふ怒濤の中へさ進んで往つた

「アッ」

さ叫んだ一刹那には早や二人の体は恐しき波に没はれて終つてゐた。月は雲を破つて出た、怒濤は月影を千々に碎いて狂びに狂ふてゐた、千鳥は頻りに鳴いてゐた。

巖頭の乙女

袂につめし小石をば またも出して見つむれば

故郷の父母の思はれて 姿さやかに目にうかぶ

生きんか苦し世の苛煩 死せんか悲しこの情

瞰下れば怒濤の死の神は 手をばさしのべ妾を待つ

水の如くに澄渡る 空にかよれる月影に

鳴く蟋蟀の悲しき音 わがあの世の餞別か

其はなむけをささながら 遺書したくむ血の涙

零れてにじむ筆の跡 今宵しきりに星のさぶ

春秋こゝに十八の 花散りゆかん月今宵

清きむくろの永久の 眠の床の水きよき



下駄は脱棄つ妾立てり 髪は亂れて風寒し

鞆靴吼ゆる浪の音 惻々せまる虫の聲

天の莊嚴地の美麗 いつはり多き人の世を

棄てて自然の土に歸す 何悲のあるべきぞ

覺悟は成れり吾が床の 淵をのぞめば後にて

しきりに呼ばう父母の 聲のきこゆる心地して

泣きてはまたも父母想ひ 想ふてまたも世を呪ふ

生の幽恨死の悲痛 妾巖頭に泣き伏しぬ

幾度思ひかへしても 生くる希望のなきものを

許せ不幸の罪の朝子を 泣けよ不幸の人の子を

旅のローマンス

木曾の一夜 一

雨の妻籠の村を出立した二人(僕と僕の友東江)は夫れでも眩ゆき落日を見つゝ  
須原の宿へ泊るこゝが出来た。

旅へ出てから二人は、よしや宿屋は汚くとも騒々しくない閑静なところと泊つ  
て来た、今夜も構ひこゝろ立派ならされ、裏には庭あり、庭には燈籠あり泉水あ  
り、其燈籠泉水を隔て、眼を遠くへ落せば、木曾の狭谷は暗緑にぼかされて谷  
川の流れ、檜林に奏つる青嵐が天樂とも響ききこは來るといふ風情ある宿、自  
分等二人は幾度可い宿をまつた喜び合つたことであらう。

所が其歡喜ははかない歡喜であつた。歡喜の夢は東の間に覺めてしまつた。



夫れは自分等がこの宿をとつて一時間たつか立たぬに若い女の一連がドヤ／＼と泊り寄せたことであつた。然も其女が見るものも見るものも皆色の黒い、汚い、醜い、土臭い田舎娘ばかり、よくも恚う揃つたものよこホト／＼感心する位。

此の女の大連中は信州諏訪の紡績工場へ稼ぎに行くべく、勧誘員に連れられて飛弾の山中から此處までやつて來たのであつた。女の細い腕——其の可弱い腕一本依頼て旅徳國へ金を獲やうと故郷を後にした女。彼等は今二三年の後には小金の一つも持つて錦を故郷に飾られるこの希望を畫いてゐるのだ。其のまた金で嫁へ支度も整ひ楽しい半生涯に移るこの期待を畫いてゐるのだ。勧誘員の蜜の如き甘き口先き——彼等は牢獄の加き工場に奴隸の如くに其身を削られはならぬ運命など露知らぬらしい、ああ彼等の喜びに満ちた騒々しい笑聲、隣座敷にゐる自分等の耳も聳せんばかり。

「非常に處へ泊り合せたナ」

「困つたナ……」

と二人は何位彼等一連によつて旅の興趣を壊されたことであらう。

「出來損ひの手古人形ばかりぢやないか」

「夫れでも僅只一人可愛げの奴がゐるよ」

「莫迦に君は目が早いナ」

「ハツハ、、、」「ハツハ、、、」

其晩は自分は碌々眠られなかつた。狭い室、狭い蚊帳、蒸す、いきれる逆ても堪つたものぢやない、夫れでも東江は先刻から大きな躰を立て、深い眠に落ちてゐる。隣座敷の女工連中も鳴を沈めた、皆眠つたらしい時計はチン／＼と十時を報じた。自分は到頭庭へこ出た、夏の涼しい月の光は庭一杯に流れてゐた、若葉青葉は靜に夜風に戦いでゐた。忽ち見ゆる燈籠の蔭に黒い影、自分は



思はず

「若い女だッ」

と叫んだ、あゝこの女こそ先の工女連中の一人でしかも東江の言つた僅只一人の可愛い女の夫れであつたのだ。

## 二

あまりに突然なので自分はどんなに此若い女の黒影に驚いたか知れなかつたが其の驚いた自分の黒影を見た彼女も亦確に驚いたに相違ない、絹のやうな月の光を浴びてゐる故かも知れぬが、彼女の顔は凄いまでに白かつた。

「貴方は何うして此處へ……貴女は一体誰方……」

自分の聲は確に震ひてゐた、震ひたのは聲ばかりではない、体までが焼酎でも浴びせられたが如くに、イヤに寒氣がして落ちついてゐられなかつた。

月は益々冴わた、木曾の谿谷から湧く涼しい夜風は、靜に吹き來つて庭の木の葉や二人の白地の浴衣を戦かした。女は只だ俯向いては庭の地面にうつる自分の影を黙つて見詰めてゐた。自分も彼の女の答を待ち只黙つて眩しいまで明月光を全身に浴びてゐた。

「何うしなされたのです、貴女は或は今日この宿に泊つたあの女連中の仲間ではないのですか」

と自分は皮を切つた。

「ハ……イ」  
と彼女は漸くにして答へた、俯向きながら僅に答ふる彼の女の顔を覗けばこは如何に露の如き涙の滴を落してゐる。

「何うしたのです、この夜中に若い女が一人憊那庭へ出てゐるなどは、何か其處に理由があるに相違ないと思ひます、私も今日茲へ泊つた旅の者です、因も縁も無い身ではありますが、目のあたり貴女の悶ありげの御様子見ては、其



處に色々悲しい運命の弄びでもあるかの如くに思はれて氣の毒でなりません聞かせらるゝこの出来るのであつたならば……」と自分は先づ庭の石に腰を卸した、彼女も自分の傍に蹲踞つた。そして涙ながらに彼女は彼女の身の上を悲しい口調で話した。身の上話とば次の通り。

彼女は飛彈高山在久々野の百姓家の娘である、母は早く死んで今ゐるのが繼母其繼母がまた繼母のモデルにでもなりさうな悪辣残忍の女、彼の娘は十二の年より幾星霜この繼母に何位泣かされたか知れなかつた。久々野の村は田舎ではあるが近所に銀山がある、銀山には酒さ女より欲求の無い獸の如き労働者がゐる、其欲求を満たすべく久々野には料理屋や曖昧屋が中々に多い、夕靄漂ふ頃になると恁那田舎には珍らしいこま白い艶かしい顔が其處此處の軒燈の下に浮出される、三味の音も洩れる、端唄の聲も聞ゆる、酒の匂、脂粉の香、久々野の村は毎晩此の賑な歡樂の中に、悲しい罪惡が潜に行はれて行くのであつた。

彼女の父親は正直一方、何方かさいふさ意氣地なしのわ人好しであつた。人並小賢しい繼母の口にはこのわ人好しの父は團子の如くに丸められてゐた。

彼女は百姓の娘さば受取れぬまでに容貌善しである、圓ぼちやの人なつかしげの顔は確に誰の目にも可愛い娘ださいふ感じを興へる。狼の如き繼母の目にも矢張り映つた。だが狼はこの小羊の如き彼の娘を可憐さば思はなかつた、自分の飢いた腹の爲めにはこの小羊を賣ることも食ふことも少しも辭さなかつたイヤ親さし子さとして當然の權利であり義務であるさしか思つてゐなかつた。

繼母は時々彼女を口説いた、泥塗れになつて働くよりも白粉塗つて男に可愛がられるが何位幸福であるやら分らぬさ——

自分ばかりでは駄目だと思つた繼母は父親を説服して父親から彼女に強硬に迫



らせた、父と母二人の壓迫——彼女は身も世も無いはかなさに泣いた。

其頃彼女には可愛い男があつたらしい、彼女は可愛男に相談する、男は驚き且つ悲しむ、だが其可愛い男は兩親の意志を躰させるなどこの矢面に立つ地位でもなければ、またさういふ自由の身ではなかつた、二人は幾度か二人等のはかなき戀と運命に泣いたことであつたらう。久々野の村へ諏訪の紡績工女の勧誘員の入つたのは其時であつた。彼女は電光石火。

「あッ紡績工女にならう、ろして金を送らう、いくら繼母だつて承知してくれらるであらう」

と思ふ後より胸に襲ひ來るは可愛い男に別るゝの痛さである。

繼母の矢の如きの催足口説に毎日攻らるゝ彼女は他を顧慮する餘裕がなかつた何うぞ紡績工女に賣つてくれ、其れ金で何うぞ勘忍してくれと窮訴哀願。狼の如き繼母も金になるには二つはない、只少々寡ないのが憾み、不承々に承知した。

「一昨日久々野を出立して來ました。あの人が何うしてゐるかと思ふ……」と彼女はまたも泣く。

僕は暑さで眠られないのであつた、彼女は戀の悲しさで眠られぬのであつた、全じ庭で全じ月影を浴び、全じ涼しい風に吹かれ、全じ木の葉の囁を聞きながら、彼女は萬斛の涙に泣いてゐる、思へば實に氣の毒の者である。

彼女の名は到頭きかれずにしまれた、須原の宿に別れてより春風秋雨幾星霜、あゝ薄命の少女、今は果して何うして暮してゐるであらうか。

## 鳥 井 峠 一

越後と岩代との國境なる鳥居峠——岩越線の開通した今日では彼の風情ある峠も通る人さてもあるまい。うねりくねりさ曲りに曲つた縣道、赤土に根を露出



せる松の林。谷川の流れ、玉の如うな泉、鼻を衝く白百合、藪に啼く鶯。自分は幾度彼の趣致ある峠を掛けたことであらう。鳥居峠と僕——其處には忘るゝことの出来ぬローマンスがあるのであつた。

時は八月の暑中休暇であつた。自分は津川から柳津へ出て彼の清冽玉を欺く只見川の上流を遡つて日光の方へ出やうと企てた。夫れで、足に誇を有つてゐる自分は、津川から柳津までの十四五里の道を一日で掛けやうとした。夫れには朝は餘程早く出立せねばならぬと考へた。さうだ自分の津川を出立した日は日が漸く飯豊、御神樂の山々の間から上らうといふ、五時になつたかならぬかの頃であつた。

鳥居峠は津川を離れて一里ばかりにして始る、さう険しいことは無いが長い。上下三四里、間々に小さい里々はあれども彼の丘此の澤の下に三十軒二十軒と点在してはゐるごくく淋しい峠である、況して自分の其峠に掛つたは朝まだ

早きことゝて人一人通らない、自分は爽やかな朝の空氣に顔を撫でながら大きな聲で詩吟やりつゝ頂上へ登つて往つた。

突然聞ゆる女の苦悶の叫——

見れば路傍に若い女——女學生風の女が腹を押へて苦悶してゐる。

朝まだ早き此頃若い女がこの淋しい峠で——自分は不思議にも亦驚かずにはゐられなかつた。だが其不思議の解決に没頭するやうな餘裕ある場合ではない。

「何處か病めるんですか」

「ハイ……其の腹が……」

と蚊の如うな聲。

旅に慣れてる自分は寶丹を離したことは無い、直ぐポケットから出して彼女に服薬せた、彼女は暫くして稍々落ち着いたらしい。

「お蔭様で助かりまして……まことにありがたう御座いました」



と禮述べる彼女の顔。自分は刹那に

「あッ美しい女」

と心に叫んだ。

二

彼女は野澤さいふ鳥居峠の向うの麓の者であつた。若松の高等女学校の四年生であるさいふこそは、後になつて自分は知つたのであつた。何んでも暑中休暇なので、津川在へ疎いでゐる姉さんを尋ねて來た、うして今日其の歸る途中であつたのだ。彼女も朝の涼しい中にと思つて、姉さんの家を早く出たさいふ、處が彼女は軽い持病の胃痙攣を起した。人里遠い鳥居峠の中程、況してや人通りなき朝まだきに此の病氣、此の苦悶、其處へ自分が通りかゝる、彼女にすれば實際神にも佛にも思はれたに相違無い、自分は今日は是非柳津までさいふ豫

定であつたのではあるが、此の病に疲れたる可弱い而も優しい、美しい、彼女を後にして行くには、自分あまりに親切であり、また未練があつた。自分は斷然彼女を助けて歩いた。彼女は自分の肩に手を掛けながら、苦しき歩行を續けた。道は莫迦に手間を取つた。寶坂さいふ村へ着いたは、彼是十二時過ぎてゐた。其の村には人力車もあつた、自分は交渉して彼女を乗せた。其時彼女は妾は磯岡睦(假名)さいふ者、何うぞ貴郎の御名前を聞かして呉れさいふ。脆い自分は言下に聞せてやつた。彼女は幾度か、禮を述べる、車夫は走り出す。自分は遙か先に小さく消へ行く睦さんの後姿を見やりながら歩いた、睦さんは車の上で時々自分を見返つた、だが自分には白い顔が黒い幌の中から浮いて見えるばかり。

寶坂から野尻、野尻から愈々睦さんの町なる野澤へさ入つた。街の入口の小さき流れには、やさしい橋がかゝつてゐた。其橋の袂に一人の番頭らしい男が立



つてゐた。そして自分の顔や様子をスゲ／＼と見てゐた。變な男だなと思ひながら、自分は其男の前を通り過ぎやうとした。すると其男は

「もし、失禮ですが貴郎は〇〇〇〇さんではありますまいか」

と、揉手ながらに聴く。自分は慄然と驚いた。知人一人あらう筈無きこの里で——だが

「先刻家のお嬢さんをお助け下だすつて」

と言はれて、始めて自分は頷かれた。睦さん及び睦さんの両親が、番頭をして自分を迎へに出させたのだと。

三

「お嬢さんは先刻貴郎様のお蔭で助つたさて何様にお喜びでありましたことやら、家の旦那様も奥様も是非其〇〇〇さんといふ方をお泊り申して御禮申され

ばならぬと、實は私に此處へ出迎はせなさいましたやうな譯で、何うぞ今夜は是非其の……」

と番頭さんは莫迦に丁寧に願ふやうに言ふ、自分は今日に逆ても豫定の柳津まで行かれぬとすれば何うせ其邊に宿を取らねばならぬ身、況してや正直に告白するが自分は其儘睦さんに逢はずに行くのが、如何にも惜しいやうな情が胸に湧いてゐたのだ。自分は快く番頭の言ふがまゝに番頭の後へ尾いて往つた立派な玄關——睦さんの家は野澤での財産家であつた。睦さんの父と母は待ち兼ねてゐたが如くに喜んで迎へてくれる、加減も殆んど快復したと見ゆ睦さんも白い顔に賑かな笑を溢しながら「よく來て下さつて」を喜んでくれる。自分は何んだか莫迦に周圍の者にありがたがられ喜ばれることが、如何にも嬉しくも亦恥かしくもあつた。

其晩は睦さんから色々の話を聴いた。若松の女學校の事や、鷄ヶ城趾、白虎隊



の墓、東山温泉、猪苗代湖、盤梯山と夫れから夫れへさ話は轉げた。うして自分にも「何うぞ貴郎の身の上や御郷里の話でも」させがまれた。睦さんに言はるゝまゝに自分も喜んで包々の話をした、話が止んで床へ就いたは彼是十二時近くであつたらう。

翌朝起床した時は日は早や高く昇つて、障子には明い光が笑止な程映つてゐた。朝飯済して自分は愈々出立しやうとした。睦さんはじめ家の人々は「いま一晚く」を親切に止めてはくれたが、何時までさうしてもぬられぬ自分は後髪引かると思で支關を出た。

歩く途中始終睦さんの姿が眼に髣髴いてならなかつた、白い顔、涼しい瞳、可愛い口元……ああ今一晚泊れば可かつたさ自分は幾度悔ひたことであつたらう想に耽り洗んで自分は到頭柳津と若松との途を間違つて、知れぬ間に若松へ方へさ歩いてゐた。

途を間違いたさ覺つた刹那、「あゝ失敗つた」を思つたが、何ッ柳津など何時でも行ける。此處まで來たのだ戻るに及ばん。若松の方がかへつてよい。睦さんの學校のある若松、睦さんの昨晚話して聞せてくれた鶴ヶ城趾、白虎隊の墓がある、夫れが何様になつかし味があるか知れぬ。間違つたはこれ天の助だ位に自分は勇みに勇んで若松街道をさ進んだ。

時は八月の中頃、太陽は強烈な光と熱さを浴びせて、身も何も焼かれるがやう途には埃立ち、砂飛び、耳も口もザラ／＼する位。瀧なす汗、乾く咽、自分は何様に暑さに喘いだことであらう。彼の街道の所々に茶屋が掛けてあつた、其茶屋には餅や蒟蒻の煮付が出されてあつた。心天が綺麗な水に冷されてあつた所々に氷店が掛けてあつた。其氷店にはラム子や、サイダーが綺麗な水に冷さ



れてあつた。自分は思ふ程心太も食べた、ラムネも煽つた。

熱烈な日、過度の心太にラムネ——自分は到頭腸を壊してしまつた。

若松の一夜は實に苦しい一夜であつた。腸も何も千断れさうであつた。睦さんの胃痙攣も恸那でなかつたではあるまいかなどと苦しみながらも思つた。夫れでも睦さんの胃痙攣は寶丹二三服で、何うにか恸うにかなつたが、自分のこの病氣は流石起死回生の寶丹でも其甲斐ない、斷腸の想は文字上げかりではないなどツクつく感じた。

何時の旅行だつて變りはないが、懷中の温かくない自分は何時まで旅館に静養してゐる譯には行かぬ。病は我慢しても貧は我慢するこそこの出来なかつた自分は、到頭苦しい体を起して若松の宿を出立したは、病氣になつてから三日目の朝であつた。苦しい切ない其中にも、自分は睦さんを忘れなかつた、ろして睦さんの入學してゐるさいふ若松女學校だけは、迂廻道までして其前を通つて見た。

是から何處へ行く郡山？日光？イヤ駄目々々、此の体して、此の病氣して、此の財布で。あゝ戻らう／＼と、自分は遂に三日前に歩いた若松街道をさ戻つた腸は依然として癒らぬ。自分は幾度軟き野糞を路傍の畠に落したこゝであつたらう。

五

或は路傍の草の上に横になつたり、或は樹の株に腰を卸したりして、苦しみ喘ぎつして野澤の驛へ着いたは午後七時、街には燈が夢の如く夕靄にぼかされてゐた。

此の儘睦さんの家へさ幾度思つたか知れなかつたが、其處に自分は幾分の羞恥と遠慮さを覺れた。自分は遂に「諸國商人御宿」を軒燈淡く點ぜられた古ぼしい



宿屋へ泊つた。

暗い室汚ない夜具。足は疲れた、腹は痛む、往き復りの野澤の一夜は何んといふ相違であらう、翌朝自分は到頭番頭に手紙を持たせて睦さんの處へこやつた。苦しい切ないといふ事實が斯くさせたことは勿論ではあるが、自分が睦さんに尙ほ逢ひたいといふなつかしさ、其根底に潜んでゐたことは争はれぬ事實であつた。睦さんは直ぐに宿屋へ来て呉れた。

「まあ貴郎は何んだつて妾の家へ直ぐ来て下さらなかつたの本當に」を優しい眼で睨むが如うに言ふ。

「妾の病氣を助けて下さつた貴郎の御病氣は妾が必然癒して上げればなりません」睦さんは自分を無理に睦さんの家へ連れ出した。あゝ自分は此の親切な睦さんの介抱で二日ならず癒つたのであつた。

鳥居峠での偶然の人助けが今度は自分が其の助けた人に救はるゝことにならう

とは、因縁といへば因縁といふやうなもの、自分は其處に言はれぬ或物があるかの如くに思はれてならなかつた。

其後自分は睦さんには一度も逢ふの機会を有たすにしまつた、山河幾十里只睦さんのやさしい心持は時々の手紙によつて味はうばがりであつた。歲月人を待たずさか春風秋雨幾星霜、睦さんは其後若松の女學校を目出度く卒業し、今は或人の妻となり、二人の子の母となり、楽しく面白く月日を送つてゐる。今も時々音信がある、先日一家揃つて撮つた寫眞を送つてくれた、水々しい丸髷姿——あゝこの人が彼の淋しい鳥居峠で憐んだ睦さん——自分を親切に介抱してくれた睦さん——嬌眸昔も今もかはられど争はれぬ世帯じみたこの姿——睦さんの話はこれにて終る。



## 代々木の夏 一

暑中休暇の大半を東京で暮して見たいと企てた僕と東江は、休暇になるや否や長岡を飛び出したは大正元年は八月、確か二日の朝であつたやうだ。東京へ着いた二人は勿論旅宿生活などしやうとは思ひもよらぬと言つて無趣味の下宿屋生活も面黒い、何んでも東京近くの郊外——其處に手鍋下げての自炊生活を送りたいと意氣な謀反を起したのであつた。

二人は上野へ着いた其日から貸屋を探した。大久保から新宿、角筈から代々木と足を棒にして歩き廻つた。

代々木練兵場の西方、八幡森の邊は東京邊には珍らしい閑靜の地である、榛や櫟、栗や檜の若葉青葉の匂ふ木の間に風情ある層屋根や瓦屋根の、隠見するあたりは確に塵外の別天地。

「恁那處に貸屋があつてくれよばよいがナ」

「本當にナ」

と、二人は尙も疲れた足を引摺つた。

「あッ貸家があるぞ」

と東江の頓狂聲、見れば意氣な格子戸の填つた支關附の恰好の貸家、家の周圍には枳の垣が廻はされ、隣の家と共同井の屋根には瓢箪の青葉が纏つてゐた。

「良い家だナ」

「此處にしやう」

と、二人は程遠くない家主を訪れて早速借りることにした。

其晩二人は街へ出て土鍋や茶碗やの一通りの世帯道具に味噌に醤油、夫れに當座の間に合はせに煮豆を十錢ぶり買つて、今夜からの我が家へと歸つた。

晴れ渡る夏の夕空には星が頻に瞬き、銀砂の如き天の川は遙か北秩父の方へ



流れてゐた。

二

二人は揃へも揃つて夜光りの朝寝坊であつた、毎朝裏の雨戸を繰る頃は太陽は既に高く天に昇つて、眩ゆきまで明るい光を投げてゐる、代々木の練兵場では兵士の訓練が始つて、ラツパの音が勇しく朝の空氣に響いて来る。

「之ぢや仕様がな、今少し朝早く起きることにしやう」

「君さへ起きれば」

「莫迦言つてらあ」

「アハ……」「アハ……」

二人は手拭をぶら下げ楊子脚いて裏の井戸端へさ出た。

お隣の物干竿には洗濯された幼子の着物が掛けられて、水晶の様な滴がホタリ

くさ落ちてゐた。

「オイ、お隣には子供があるさ見ゆるナ」

「ウンある、だが夫れは夫れとして君奥さん見たことあるかい」

「イヤ未だ一度も」

「莫迦に別嬪だよ」

「よい年だらう」

「イヤ其様でない、實際美人だ」

「莫迦に褒めるナ」

「褒めるも褒めないも事實は事實だ、目覺むるばかりの女……」

お隣の旦那さんは何んでも何さか公論さかいふ雑誌の記者であるさうである、夕食後自分等が蚊遣り焚きながら椽に涼んでゐると必然下手の謠が聞けて来る  
「ソーレまた始つたよ」



「候一つ落し候的ののだナ」

「アハハハハ」 「アハハハハ」

此の諺が終へるさ奥さんの爽な笑聲が洩れて来る。

「聲ばかり聞いても美人ださ想像がつくだらう」

さ東江莫迦に御執念である。

「其様によいのか」

「よいさも、抜けさうな美人だ」

憚うきかされては自分も

「明日は早く起きて井戸端で拜顔の榮を得やうかな」

「さうせよ、白地の浴衣ひっかけたせ給ふ御姿は天女の天降りか夫れさも

……」

「よし明日朝ころは」

さ自分は其晩未だ見もせぬ女の姿を胸に描きながら眠に落ちた。

三

隣の奥さんが例の共同井へ顔洗に来る時刻を失つては一大事さの考を抱いて寝た自分は流石に翌朝は早く起きた。やがて瓢箪の絡み附いた井戸の釣瓶がガラ／＼と繰らるる音が、朝の水々しい空気を蕩せて爽に響いて来た。自分は

「此時ころ」

さ、楊子ソコ／＼に啣いて例の枳の垣を巡つて井戸端へさ出た。奥さんは盥を前に齒を磨いてゐた。白地の浴衣——庭下駄——白いタオル——束髪——後毛——白い顔——涼しい瞳——自分はハット驚いた、ろして

「確に見たこそのある女だ」

さ心に叫んだ。



奥さんも亦自分を見て驚いたらしい、ろして自分をスゲく眺めてゐた、眺めては物思はしげに首を傾しげてゐた。

二人は互に古き昔の記憶を辿つた、だが其記憶はあまりに古く、あまりに朦朧としてゐて、電火の如くに頭に閃き来るには餘りに自分等は年月を過してゐた。

自分は幾度聽いて見やうかなと思つたことであつたらう。奥さんも亦自分に對して自分が奥さんに對するのと同じ希望を持つてゐたらしかつた。だが自分は到頭口を切るこゝが出来なかつた、ろして其儘別れて根の垣の方へさ歩いた。

自分は縁へ上らうとする時奥さんを振り返り見た、處が奥さんも亦井戸端で自分を見返つてゐた、視線と視線——二人は体裁悪るげにあらぬ方に外らした。

「何うだ、美人だつたらう」

と東江は床の中から龜の子の如うに首だけ出してきく。

「ウム美人は美人だが……」

「何か不足でもあるのか」

「イヤ不足の何んのさいふのではないが、僕は確に見覺ぬのある女だ」

「た安くないことを云ふナ、奢る價値あるぞ」

其日自分は一日彼女を考へた、小學時代から中學、師範時代、ろして現在に至るまでに接した女さいふあらゆる女を——

「アツ分つたツ、初枝さんだ！初枝さんだ！さうだ確に夫れに相違ない」  
と、自分は思はず叫んだ。

四

僕の家は元新潟にあつた、ズット山の手の方、夕日が松林の間から赤い光を此の世へ殘して沈み行く景色などは、よく自分の家の椽側から眺められた。



自分の家の隣には香川さんといふ縣廳へ勤めておいでの方がゐられた。其家に一人の女の子があつたが、名は初枝、あゝ其初枝さんさ今日此の廣い東京の郊外代々木の里にて八九年目に相遇はうさは。

其當時は何んでも二人共十三四であつた、ちして共に同じ新潟の小學校へ通つてゐた。二人は口性悪い他の仲間の悪口を恐るゝ爲故意を隔てるやうにさ幼ながらも警戒してゐた、だが互に警戒してゐただけ夫丈二人は二人の小さい胸に或感じを持つてゐたに相違無い、告白する——自分は確に初枝さんを美しいまた可愛い娘だと思つてゐた。だが其美しい可愛いといふ感情は、花を見て美しい可愛いと思ふ感情の起きるさ少しも變らぬ單なるもので、決して他の感情の加つて居らなかつたのは事實であつた。

二人は夕食後などよく裏山へ登つては沈み行く赤い夕日を見送つたりした、かういふ時には初枝さんの睫毛には必然水晶の如うな露が宿されてゐた。初枝さ

んは優しい感情の女であつた。

或日であつた自分は學校へ辨當を忘れて行つた。其處へ初枝さんが僕の母から依頼されて其辨當を持つて來て呉れた。

「Nさんの辨當を預つて來ました」

さ僕の教室へ持つて來た時には仲間の生徒は皆自分さ初枝さんの顔さを見比べた。二人の顔からは火でも出さうであつた。

夫れからさいふものは寄るさ觸るさ多くの者は自分に弄戯つた。

「Nの初枝、初枝のN、仲良しだんよ」

一種の調子をつけて皆は自分を取捲いて離し立てつ、自分は五月蠅くも亦恥かしく實に當惑した、だが餘りに彼は言れた自分は

「其様に言はるゝなら本當に自分は初枝さんさ……」

其様事も發作的に頭へ浮んだりしたことさいあつた。



學校から退つて來ると自分は必ず初枝さんと避んだ、うしてきまりの如うに裏山へ登つては沈み行く赤い夕日に小さい悲しみを胸に刻んだ。

五

だが自分は初枝さんに別ればならぬ悲しい運命に逢着した、初枝さんの父さんの轉勤夫れである。

自分は夫れから初枝さんは二度き夕日を眺めることは出來ぬことになつた、其當時の自分の雜記帳に恁那幼稚な新体詩風の歌が書かれてある。

沈み逝く夕日 赤い赤い色

空も赤雲も赤 鴉は急ぐ松の森

あゝ初枝の君 何處にか眺む

この夕日この空 吾一人泣く松の森

此頃の事思ふと自分は或ははや美しい可愛いなどといふ單なる感情より尙一步進んだ或物が、小さい自分の胸に刻まれておたらしい、だが其刻は初枝さんに別れて一年にして薄らぎ、二年にして朦朧とし、三年にして消は、爾來幾星霜其の記憶を喚起することさへ出來ぬまでに自分は忘れて終まつたのであつた。

今朝井戸端で見た初枝さん！あああれが自分と共に赤い夕日を眺めて泣いた十三四の少女であつたのだ、其少女は今や人の妻となり、其少年や今や人の夫となり、然もこの東京の郊外代々木の里にて相遇はうきは。奇縁と言はうか奇遇と言はうか、自分は只不思議のこの運命に呆然たるのみであつた。其翌朝であつた、自分はまたも初枝さんに逢つた。うして

「もし貴女は初枝さんでわいでとばありませんで」

「貴郎はNさんで」

「夫れでは矢張貴女は初枝さんで」



「貴郎は矢張Nさんで」

「暫くでしたネ」

「まあ本當に子」

暫し二人は低首沈黙、感慨無量。

「昨日此處で逢ひしました時何んだか見覺のある方と思つて妾は昨晩一晚考へて」

「私も」

「左様」

「だがこゝにいふ處にこゝうして逢ひしやうとは」

「不思議の御因縁ですネ子」

「さうですナ」

暫し二人は井戸端で時の過ぐるも知らずに話に余念なかつた。

六

夫れからといふものは自分はよく初枝さんの家へ遊に行つた。主人はまた雑誌社へ出てゐるだけ文筆に興味ある人、話せば話す程話が合つて興の盡きるを覺はなかつた。

「さうお話ばかりせず少し菓子をもち上りなまつて」

と、初枝さんは赤い手柄の燃ゆる丸髷を少し傾しげて菓子器を自分の方へさ進めるのであつた。

自分はまた友の東江さんもよく行つた、東江は快男子談論風發、初枝さんに主人夫れに自分、四人はよく話した。

「西瓜切る所ですからおいでなまつて」などとよく懲越しに自分等と呼んでくれた、行けば椽側には蚊遣が焚かれて主人公は猿股一つになつて左圍扇、



初枝さんは井戸へ釣し置いた冷い西瓜を持つて来る、夏の暑さは初枝さん夫婦の好意によつて拭はれ、涼味身に迫るの思がしたのであつた。主人の下手の謠も時々聞かせられた、其返禮に吾々の下手の唄や詩吟もきかせてやつた。

「越後の方は何うしても音聲が重くて」

など、初枝さんに冷かされたりした。

「これでも新潟の小學校時代には唱歌は甲だつたよ」

と、初枝さんを見れば初枝さんは昔を思出して、頬を紅く染めて頼りに團扇で扇いでゐた、髪のはつれを頸足に靡かせて……憇那にして四週間の時日は夢の間に過ぎ、吾々はこの楽しい代々木生活を引上げればならなかつた、自分等殊に自分は何様に名殘惜しくも亦悲しかつたことであらう。

「夫れでは折角なつしやで」

「貴郎も何うぞ」

と挨拶終して身は上野行き電車に乗つたが、心は代々木の優しい人の上に離れずにあつた。今もあの風情ある代々木の里、あの枳の垣ある家、瓢箪の絡んだ井戸、西瓜、蚊遣、謠、唄、初枝さんま美しい記憶は夫れから夫れへさ辿られるのであつた。

### 澁川の宿 一

澁川の宿へ着いたは彼是六時過、其日も到頭雷ばかりで夕立は來ないで仕舞つた。其晩は暑い晩であつた。六疊の間に釣られた蚊張の中で自分は一人この數日來の旅の追想に耽つてゐた。湯澤の温泉——荒涼たる三宿——三國峠——女馬子——沼田の城趾——利根の清流——

其日は自分は僅か八里しか歩かないでしまつた。常に健脚を以て誇つてゐる自分には此八里の道程が莫迦に短くも亦遺憾にも思はれてならないのであつた。



だが夫れには悲しむべき原因があつた。

沼田から下利根の清流に沿ふて下るあの街道。一方は山一方は水、山には若葉青葉が薫つて藪には鶯が顔に啼いてゐた。河には清い水が流れて河蛙が顔に鳴いてゐた。瀧なす汗を拭ひながら此山此川の間を綴る街道を下つて来た自分は余りの水の清さに草鞋を解き服を脱ぎ其利根の清流へさ飛込んだのであつた。

水煙——冷い水——爽な心地——自分は或は拔手を切つて瀧を横り或は断崖より渦巻く淵へさ飛込んだり、實に可い心持で水の中を縦横に騒いだ。

失敗——泳いでる最中自分は左足の踵を岩角に健か打ちつけた。だが其時は左程にも感じなかつたがさて歩き出して見たら妙に變だ、痛い、苦しい、歩けない、國を出てから幾十里、是から榛名山へも登らねばならぬ、妙義山へも登らねばならぬ、さては其先東京まで歩かねばならぬさいふ計畫や希望を懐いてゐた自分には、此足の打撲は實に悲しむべき大事件であつた。

宿屋で先の美しい追想の走馬燈を頭の中に廻してゐる間にも足はズク／＼痛める、果ては美しい追想どころではない、明日の伊香保から榛名行きは思ひも寄らぬこと、今更子供じみた水泳など廢せばよかつたなどと悔いても其甲斐あらばこゝろ。

宿屋の前を悲しい笛の音を響かせて按摩が流して往つた。按摩に此足を揉んで貰つてはさ電光の如く考が頭の中に閃く、直ぐに宿の女中に頼む、女中は按摩を呼ぶ、按摩は案内せられて吾室へさ来る。見ればこは如何に、年の頃未だ十七八とも思ほしき乙女——眼こゝろ見れば輪廓のくつきりした優しい可憐の顔立。この若い按摩さんには哀むべき一條の物語があるのであつた。

二

十七の按摩名は蝶、生れも家も此澁川である。世が世であり、また父が父であ



つたなら蝶さんも、其名の如く蝶よ花よ可愛がられたであらうに、花いつまでも花ならず、蝶永久の蝶ならず、散り逝く花、亡びゆく蝶、あく其處が所謂人生の悲哀ぢやあるまいか。

蝶さんの家は此澁川に指折の財産家であつた、町會議員だとか会社の何とかがいつたやうな肩書の三つ四つも有つた人であつた、其父あゝ其父は年もあらうに四十代の分別盛に或藝者に狂ふた、狂ふた父には妻も子も無い、氣の毒な、蝶さんの母親は一人可愛い蝶さんに乳首含ませながら空圍に泣いてゐた。だが恚ういふやうな事實は世間に珍らしくないまでに一般的のものになつてゐる。だが此一般的の此事實が蝶さんの失明となり、母親の發狂悶死となり、はては父親の自刃にならうとは……。

酒に酔ひ女に狂ふた父は夫れでも十日に一度位は家へ歸る。心狂つてゐる父の目には妻の顔も夜叉の如くにも見えたであらう、可愛い蝶さんの笑顔も或は

悪魔の如くに見えたかも知れぬ。父と母とは淋しい悲しい而も不快な心持で對座した、母も可憐い女の愚痴を滑らした、父は省察無き男の暴威を揮つた。衝突、喧嘩、涕泣、叱咤、恚ういふ悲劇が始終蝶さんの家庭に繰返された。其間にも調停者もあつた、忠告者もあつたが脱線した車の再び軌道に戻り上るには一通りの時間や困難では出来なかつた。蝶さんの四つの年、ああ其年の秋十月例の悲劇を演ぜられた、憤怒の父は尺で母を健か打つた、だが哀れ其尺は母には當らずに母の懷に夢見つゝある蝶さんの兩眼を打たんとは。力は餘つて尺は中から半分に割れた。蝶さんの眼は四歳を限りに永久に失はれたのであつた。蝶さんの失明の刹那は母親の發狂の刹那であつた。鮮血迸る吾子蝶さんの眼を見たる母親の眼には、一種異様の凄光が閃いた。血相は變つた、髪を亂した母親は脱兎の如くに泣き叫ぶ蝶さんを抱いて戶外へ走つた。母親は叫んだ、聲を限りに叫んだ、ろして笑つた、聲を限りに笑つた。ああ蝶さんの母親も亦



三十四歳を限りに永久に、精神上の不具者となつてしまつたのである。

三

「妾本當に其當時の事思ふさ口惜しうござります」さ、蝶さんは自分の足を揉みながら涙を頬に傳はせた。

「左様でせうさも、左様でせうさも。世にも不幸な貴女の母さんの身の上、話聽かざるも私も泣かされました」

蝶さんは暫し黙つて昔を偲ぶが如う。父の殘酷が深く刻まれた見ゆぬ目には、涙の露が光つてゐた。

蝶さんの失明、母の發狂の時は父が永い間の悪夢の覺めた時であつた、だが遅い、あゝ遅い。而も其覺醒は如何に高價の犠牲を拂ひしことよ。

父は其晩座敷の真中で立派に腹を切つて死んで仕舞つた。父の死、母の發狂、

子の失明。蝶さん一家は實に悲慘の悲慘の幕で閉ぢられて仕舞つた。

其後發狂した母親は冷酷な社會の、嘲笑罵詈の裡に殺されて仕舞つた。あゝ蝶さんの漸く六つになつた春四月。

萬にも近い財産も鬼の如うな親類や世間の者共に何にかせられたことやら分らなかつた。春風秋雨幾星霜、世にもはかなき孤兒なる蝶さんは按摩さまでなり下つて、今日は吳客明日は越客、毎夜にかはる旅の人の疲れた体を揉んで僅の金を懐にして暗い吾が家へと歸る、思へば氣の毒の者もあればあるものである。

澁川は伊香保への入口、東京や横濱邊の紳士がやつて來る、やつて來た夫等の人々は皆蝶さんの話をきかされて泣いて行く、今では蝶さんの身の上話は土地の評判になつてゐることである。

涙の中に蝶さんは自分の足を丁寧に揉んでくれた、可愛い優しい而も世にも不幸な女の手の力に、足の痛みは妙に抜けた、冥途に足は軽くなつた、翌朝起上



つた時は實に不思議に思はるゝ位。自分は、この蝶さんのお蔭で伊香保へも行き  
榛名へも登り、思ふ存分旅の気分を味うことが出来た。あゝ十七の若い按摩—  
—失明の蝶さん——今果して如何。

T さ ん へ

Tさん鯨波の驛に降りて透徹碧瑠の如うな潮に浴し、高原田口の驛に降りて  
玲瓏玉の如うな温泉に浸つた、其の清浄な体を風塵高い都の真中へこ入れたは  
五日の朝、巨大な紺青の大圓鑄の中にこの十数日來凄くも睨み通しの日輪の前  
に曝された家々の蒼々は陽炎の如き焔を吐き、立ち並ぶ街樹の青葉々は萎ぬ  
に萎ぬて吹く風に戦ぐ力も無げに弱い吐息をついてゐました。

私が慙うして休暇一杯を音響と色彩とに包まれた都の忙はしない空気に浸た  
つた生活を續けることは之で三回でありました。一回は代々木の自炊生活、一

回は澁谷の下宿生活。而も前二回は共に隠士でも氣どれさうな高臺緑深き郊外  
の生活でしたが、今回はまあ何んといふ相違でせう、熱闘身も煮らるゝ如うな  
下町の真中、續き渡る家々の屋根は丁度際涯もない波濤の如く、其波濤の上に  
踊る彼方此方の物干臺の干物を、せめて白帆に見立てゝ興がる其のはかなき加  
減、Tさんろりや實際文明には詩も歌も生れさうも無いぢやありませんか。

然しこの干物臺、この都人の唯一の安息所なのでした。一風呂浴びて晝の暑さ  
を洗つた体をこの臺に横へた其の心地——無邊の天下に懸る皓々の月、閃々光  
を碎く星の瞬き。何うして無限の歡喜と平和と自由とを覺はずにゐられませう  
隣の物干臺にも團扇が見ゆる、向ひの物干臺にも扇子が見ゆる。團扇と扇子が

「よい風が吹きますね」

「これで廻りますよ本當に……」

「さうですよ」



臺から臺へと交はす言葉も涼しげに、猫まで臺の柱と柱との頂で

「ニヤン／＼」の挨拶交はす夏の夜のわかしさ。

Tさん隣さいへば女主人なんです、うして義太夫の師匠さんです、毎日入れ代り立ち代り弟子達が稽古に來ます。下町の情調が三弦の音にさける物懐しさに、私は幾度恍惚として聞いてゐたことでせう。弟子の中に女が二人來ます。一人は三十近い年増、一人は十六七の娘。大摸様の浴衣に軟い白い肌を器用に包んでつましげに稽古する姿は、却々に可愛いらしいです。

「……國へ歸れば父母の……思も寄らぬ夫定め。立つる操を破らじ……」  
 なんて流石に遺瀨無い哀愁の情を聲に孕ませて唄ふらしいです。

Tさん私は相變らず朝寝坊してゐます、うして其の寝呆けた体を必然朝湯に浸けて來ます。執筆、讀書、恁那／＼としてゐる中に正午、雜語を晝寝の連れにして一眠りして起き、氣のまかぬ欠伸の一つ二つつく頃は艶めかしき夏の夜が

其處此處へ寄せて來て、街は光の海色の海と化してゐます。夏虫の如くに其の色、光を追ひ歩く都の人の美しい姿。Tさん夏の東京は夜に其の生命があるやうに思はれます……。

焼 芋

勉強などすればこころ、自習時間の長きを欠伸と居眠で過した皆は人員検査の喇叭で甦へり就床喇叭で吾先にと寢室へと突貫するのであつた。

「今日外出の時本町角の焼芋屋に黒筋（某女學生徒の代名詞）が立つてゐたつた」とバルチック艦隊でも発見したが如くに報告する。「芋好きなきことは吾々以上だナ」などの話が落首の様に寢臺から頭だけ露出した頭と頭との間に交換された。「何うだ之から遅いけれど賄の奴等叩き起して焼芋買はせにやらうぢやないか、舎監も早や寝たであらう」と隅の頭が謀叛起す、一室の大小七八個の頭



之皆則村、師直の徒直ちに其響に應ずる。左様なら之から賄叩き起す辨理公使を選出しなければならぬと、評議の結果はヂヤンケンに仕様と云ふことになつた。何の寢臺も皆蟬の脱殻の様、皆は素裸の儘寢室の中央に集つてヂヤケンボン！、命なる哉ヂヤンケンの結果は僕が乏しきを其大命に承るこゝになつた。恚うなつては大命もだし難い、僕は電燈淋しく煌いてゐる長い廊下を通り抜け、闐として聲無い死んだ物の様な廣い食堂を辿つて漸く賄部屋へ着いた、ろして眠がる炊夫を起し買にやらせた。炊夫は蒸氣の立つ焼立ての奴を買つて来た、僕は其包を提げて使命を全うすべく例の食堂を進んで来た、吁、天なる哉命なる哉、向ふより舎監が赤二本筋の提灯振りながらヅカ／＼とやつて来る。窮した僕は包諸共食卓の下へこ身を忍ばせ息を殺してゐた。赤筋は漸々近いて来た、僕は固唾を呑んで天佑を祈つた、舎監は遂に知らずに僕の前を通り過きんとする一刹那

「何んだ、大層焼芋の匂がするナ」と舎監は立止つて赤筋を振り廻はした、其振り廻はした赤筋が食卓の下で中腰になつてゐた僕の鼻面へ緊された。吁、仕舞つた、少しの所だつたが天祐が足りなかつた、此匂がなかりせばと今更ら包の中の芋が怒めしかつた。

「誰だ？」「ハイ」「ハイちや分らん誰だ？」「ハ……ハイ」「Nぢやないか何にしてゐるのだ、其包は何んだ」「其何んです……」「焼芋ぢやないか」と云はれた時には冷汗背に瀧なすの思がした。「三年生にもなつて可かんぢやないか」「ハイ」「氣を注げなさい」「ハイ」「芋は炊夫の所へ返して来なさい」「ハイ」「よるしいか」「ハイ」到頭「ハイ」で其場を通して方々の体で寢室へと逃込んだ。其晩の舎監はBといふ兵式の先生であつた、少尉上りさかの赭顔虎髯、見た所の恐しきに似給はず極優しい親切な人であつた。吁僕は其芋の使をしてから茲に數年、先生また母校を去つて今は宮城縣に居てだといふ外香として其消息を知



らない、僕は毎年焼芋の時節になると必ず先生を思ひ出すのであった。

## おけさ踊の名人

勉強よ運動よと騒いでゐる學生でも、裏面を叩いて見ると中々隅へ置けぬ隠藝を有つてゐるものが多い、殊に僕等のクラスには夫が多かつた様に思はれる。詩吟が上手で女學生に追廻はされたといふ色男もあれば、淨瑠璃が甘くて自習時間でも何んでも「夫や聞はませぬ傳兵衛さん……」などうやらかす勇士もゐた。追分松前が上手で人を泣かす藝者もあれば、英詩獨唱が得手だといふハイカラもゐた。十人十色皆夫れ相當に隠藝を持つてゐたが其中に最も異彩を放つたのはK君のおけさ踊であつた。

K君は有数の巨頭家であつた。クラスの者は氏に鯨鯨なる仇名を奉呈した位であつた、洋物店へ行つても氏の頭にはまる帽子の出来合さてはなかつた、夫で

氏は何時も特別注文直径八吋半のものを造つて冠つてゐたものであつた。其K君が其莊嚴なる頭に鉢巻させて、嫺かな姿、淑かな立居でのれけさを踊るのだから面白い。「伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ」と自ら唄ひ自ら踊つた氏の姿態、今も躍然として眼底に浮んで来る。確か天長節祝賀會の時であつたと思ふ寄宿舎の各室から一名宛選手を出して得意の隠藝をやり、大いに興を添へやうと競ふたことがあつた。K君は其名譽なるオリンピックの競技の選手として例の鯨鯨の様な頭に鉢巻させておけさを踊つた時には、當日第一の出来よき賞讃を博したのであつた。

おけさに於て天才であつたK君は、數學に於ても天才であつた。他の學科は左迄でもなかつたが幾何代數さきでは、先生でも時々氏に參らせらるゝことがあつた。數學で天才であつたK君はまた眠ることに於ても確に天才であつた。始業前に眠り、晝休に眠り、夕食後また烏渡眠り、夫でまた九時からの就床には



人並に眠つて鼾聲雷の如くこね出でにやるのであつた。氏の本箱の蓋に恁那事が書いた張紙があつたものだ「間食嚴禁六時より睡眠」六時とは寄宿の夕食の時間である。氏は其夕食済ませるに直ぐゴロリとやるので、よく自分で定めた此法度を勵行したものであつた。だが間食嚴禁の方は睡眠の方程勵行しなかつたらしい、時々氏の姿を談話室に見出すことがあつた（寄宿に談話室なる一室があつた、其處へ市の商人が菓子や果物を持って来て店を出し、生徒は其處でパク附たものであつた）數學の天才K君は、卒業後二年にして文部省檢定試験に合格せば自殺するといつて居つた。だが氏の成功は未だ耳にしないが、依然として例の鯨頭を振り翳して此地球の空氣を吞吐してゐる様である。

聲の可いS君

音樂の時間は吾々の休養時間であつた。倫理や教育の先生に散々絞られて疲れ

きつた頭を、此の音樂の時間に恢復するのであつた。恢復するときは嘔々たる音樂によつて甦るさいふのではない、音樂の先生の優しくて恐しくないさ見縊つての我儘が出来るからのである。恁ういふ亂暴の生徒相手の音樂の先生は洵に慘なもので、教へる張合も何も無い、只四五人の特志の生徒相手に教へる位のもので、他は大抵其特志家の後の机に陣取つて新聞見たり、雜誌讀んだりノートに漫書を書いて四邊の者を笑はせたり、先生の惡口書いて廻覽にしたりして「唱歌其方除に遊び騒いだものであつた。「皆さん其様事では卒業してから困りますよ、卒業するに直ぐ教へればならぬ身の上ぢやありませんか」などと苦味りきつた先生の口説も皆には馬耳東風であつた。其馬耳東風組の生耳を握つた親方が即ちS君であつた。

S君は魚沼三宿邊の出身であるといふことだ、成程氏の風貌は魚沼出身だけある人を頷かせるに十分の頑強と蠻氣さを有つてゐた。だが夫でゐて氏の聲の



美しいと云つたらない、宛轉玉を轉がすの形容も古いが實際鶯の初音までも云ひたい位、壁を隔てて聞けば何様優男だらうと思はせる咽喉を有つてゐる。其聲美しのS君が音楽を蛇蝎の如くに厭つて馬耳東風組を煽動し、教室を沸かせる所が彼の茶氣俳味のあるところで面白いなど、當時吾々は大いに彼に幼稚な喝采を浴びせたものであつた。一度先生が音楽の目的如何と發問された時にS君は速座に、シンガリの人物を養成するに在りと毒吐いて、大いに目玉を頂戴したこともあつた。或時また今日は先日教した「寧樂都」を稽古致しませう、Sさん立つて歌つて御覽なさいと指名された時など、糞度胸の可いSは習ひませんで歌はれませんと白々しく嘯いた。所が何位優しい先生でも虫の居所が悪かつたと思はれ、習はぬ筈はありません、君は先日の音楽の時間には缺席して無いぢやありませんかと痛棒一振。所がS君には暖繩と腕押し「左様でしたかな」と洒々然として彼は歌ふべく突立つた。先生の伴奏で愈々Sは歌ひ出し

た。出しは出したが驚く哉Sの歌ふ歌の詞は、確かに「寧樂都」の文句に相違はないが其音調節曲は都々逸であつた。例の人をして震ひつかせるが如きの美音は、音楽室四邊の壁に反響して、無聊に唄ふ名妓の調かとも思はせた。先生は驚いて「まあ止めなさい、止めて下さい」と兩手を舉げて制した。S君は「左右ですか」とまた闕せざるものゝ如くに腰を卸した。

S君は卒業後高等師範に入學し、今は某縣立中學校に奉職してゐる、縁に烟る初夏の雨降る夕などよくS君の唄を思ひ出すことがある。

變 な 男

多くの者が試験勉強に離離してゐる間にAは靜に小説を讀んでゐた。多くの者がボートよテニスよと運動に熱してゐる間にAは靜に思索に耽つてゐた。多くの者がパンを嚙りラム子を煽つて壯語してゐる間にAは靜に詩を作つてゐた。多くの



者が先生の性癖や缺點などを批評し合つてゐる間にAは靜に眠つてゐた。偉人や傑士に憧憬も渴仰も有たぬ代りに先生や友人に何等の親味も信頼もAには無いらしかった。學生としてまた世間の人としての所謂成功さか立身さかいふことの如何なることであるかは知らぬではないが、然し自分から努力して先生の信用を得やうの、社會上の榮達を計らうのといふ様な心は微塵もAには無いらしかつた。四十人からのクラスの中に心を許すものも無ければまた心を許され様さと思はなげであつた。勉強すればクラスの一二番の成績は立所に得らるゝ頭腦を持つてゐながら努力すべき何物も無い。Aには凡てが詰らない煩しいのである。友人や(友人といふ友人はAにはなかつたけれど)世間の人を悲惨に見ても氣の毒さ感じない代りに、友人や世間の人を榮達出世を羨まないといつた風であつた。凡てがAは孤獨寂涼。教室へ出るのも厭、勉強するのも厭、運動するのも厭、遊ぶのも厭。若し彼に聞いたなら生きてゐる夫自身さへも厭であ

つたのかも知れない。同クラスの吾々は彼を「二世藤村」と仇名してゐた。二世藤村は文才があつた。彼一度筆を執れば名文玉章立所に湧くの概があつた。實に天才であつた。然れども學校は愚かクラスの者でさへAのこの天才を知らぬものが無い位彼は多くの者に評判さるゝ事を苦痛に思つてゐたのであつた。當時吾々の寄宿舍で讀まれた東京新聞の中で最多數を占めたは讀賣新聞であつた。當時の讀賣には露伴の「天打つ浪や」心のあさ」が載せられ、文壇の露伴が露伴の文壇かさまで謳はれた評判物であつた。Aは教科書は讀まなくとも「天打つ浪」を讀んだ。教室へ出ずに缺席しても「心のあさ」を讀んでゐた。彼の思想や行動は道德、理想、或は宗教を信仰に繋ぎしての師範教育には、所謂危険思想でもあり不良學生でもあつたのだ。彼が三日間缺席して書いた小説「水車小屋」は讀賣新聞の懸賞大募集に二等に當選されたるも、彼の顔には何等の緊張した光を見出すことが出来なかつた。うして彼は當選を却下して原稿の返戻を



新聞社へ要求した位であつたAは凡てが此調子であつたのだ。黄ばんだ顔、天才的の鋭い眼光、瘦せた体、今も眼前に髣髴する。Aは遂に學校を中途にして廢して仕舞つた。今一年辛棒すれば先生になれるのにと端の者が却つて惜しがつた、Aには三年の學業を捨てるは弊履の夫にも値しなかつたのだ。Aは其後東京へ出たといひ、大いに困苦してゐるといひ、露伴に救はれたともいひ、樺太へ渡つたといひ、今は北海道旭川師團の御用商人になつてゐるといつてゐる。あのAが前垂姿の商人に——Aを解するものは實にA以外には無かつたのであつた。

旅の手帳の中から

◇海府浦の勝

海府浦の勝は馬下にはじまつて寒川に終る葡萄山脈の餘脈が海に没する處、絶

壁となり、懸崖となり、離れて群島となり、列嶋となり、孤嶋となつてゐる。岩あれば必ず松あり、松あれば必ず蕨が纏つてゐる。松の岸、松の島、其處を洗ふに玲瓏透徹の海水を以てしてゐる。白帆は沖に動かすに凝としてゐる、白い翼を明い日に射させて鷗が舞ふてゐる。

海府浦の勝は笹川附近を以て最としてゐる。海潮吞吐する洞窟、洞門、舟は危く縫ふて漕いで行く、涼しい爽な風が先づ夏の汗を忘れさせる、岩燕がヒラリ／＼飛交ふてゐる、舟は幾度か洞門を潜り島影を廻り、水面に映る緑の影を碎いては其先々々漕ぐ、奇しき形の岩、其岩角に危なげに枝を伸ばした松、垂れた蕨、實に應接に違ない。粟生の青螺は海上遠く彼方に薄く煙ぶる。

◇野 宿

淡い朧月は時々流れ来る薄雲に覆れて益々淡く、近い遠い丘も里も森も林も唯



一面に朦朧と夢の如くにぼかされてゐた。二人は

「此處にしゃう」

「宜し」

と、縣道と山への小徑との分れ道の丘に積まれた葦を聲に今夜一晚を明さうといふのである。朧月に透せば時計は二時の處を刻んでゐた。犬の遠吠さへもきこはぬ……

今夜土崎港を出發したは十時、秋田の街を犬に吠はられつゝ通り過ぎ、御物川橋上に着てゐる莫塵を敷いて眠りは眠つたが、川風の寒さで堪らさず、二人はまたも疲れた足、弛んだ氣力を勵して漸く此處まで辿り着いたのであつた、綿の如ろに疲れた自分は轉ぶが早いか深い眠に落ちた。

連の東江は昨日から尻を虫に螫されたさか何んさか言つて、頬に痒がつてゐた。此時も東江は眠れずに無闇と自分を促して出發しやうとした。

「オイ東の方が白んで來たぞ、起きれ」

と、自分は不承不承に寢言半分に承諾した。見れば東江はズボンを脱ぎ尻穴を朧月に向けて頬に尻を搔いてゐる。處へ突如として黒い偉大な影が現はれた、背には斧を入れた網袋を負ふてゐる。

「誰だイツ其處にゐる奴はッ」

破鐘の如き聲は四邊の寂寞を破つて二人の耳朶を強く打つた。だが糞度胸の可い東江は夫れしきの聲に尻古垂れやしない。

「俺だイツ」

と、ブルドッグが噛みつくやうな聲。

「何してゐるのだッ」

「尻搔いてゐるんだッ」

尻搔いてゐたの一語には流石の偉大漢も笑はずにはゐられなかつた。彼はクス



／＼笑ひながら山の方へ姿を消した。  
二人は後で腹を抱けて笑つた。  
星が一つ南へ流れた。

◇日光での喜劇

東京を出發して日光へ向つたのは何んでも八月の八九日頃。皇太子殿下（今の今上天皇陛下）が日光へ御避暑にいらいで遊ばすさて、日光の街は上へ下への騒ぎの日であつた。

其處へ飛込んだのが例の東江と僕。二人とも垢や汗に滲んで旅に疲れた單衣を纏ふてゐた。持物さては風呂敷包一つさへない、只犬殺棒みたいの太い棒を一本づゝ——道々の殿下奉迎の爲に警戒してゐた警官といふ警官は皆怪訝の賢しい眼で自分等を眺めた、二人は故意さ太い棒を振り／＼大股に歩いた、到頭一

警官は自分等を誰何した。

「何用事ですッ」

變調を帯びた東江の辯ははや警官の感情に高い波を打たせた。

「用事があるから呼んだのだッ」

「夫れだから何用事だと聞くのだッ」

全然ブルドックの嘴合ひの如う、彌次はたかつて忽ち人山を築く、自分は笑ひながら東江と警官との嘴合ひを大なる興味を以て眺めてゐた。

「今日は皇太子殿下の御行啓あるので」

「其様事は知てるよ」

「お前等の様子は夫は何んだイ」

「いらぬ御世話です」

「不敬に當るぢやないか」



「まだおみねになりません」

「一体お前等は今日何處から来た」

「東京から来た」

「何しに来た」

「来たいから来た」

「来たいからきて何か外に理由はあらう」

「来たいさいふ理由で」

警官の手はいつの間にか鋸を握つてゐた、東江の手はいつの間にか棒を握つてゐた。自分は一入ケラ／＼笑ひながら芝居を眺めてゐた。

「貴様は穉殿の瀧へでも落ちに来たのだらう、其様服装して」

「恁那服装すると瀧へ落ちるものですか」

「御滞叢中左様の事あつては實に——」

「御滞叢中でなくとも左様の事あつては此方が迷惑します、命は一つしかありませんから子」

「警官を侮辱するなッ」

警官の一喝は東江には何等の反響もなかつた。良い加減にして自分は中へ入つた、ろしてまた太い棒を振り／＼東照宮の方へ急いだ。

◇藤峠のお神さん

「藤峠のお神さんはまだ壯健であらうか」

自分は暑い夏を迎ゆる度に思ひ出すのがこのお神さんの事であつた。

藤峠は津川より會津への途中の峠である。さうだ上り下り三里もあらうか、蜿蜒と曲りに曲つて登つて行く途には、玉の如な清水も湧いてゐる、鶯も啼いてゐる、白百合も匂ふてゐる、實に趣味あり風情ある峠である。



其藤峠の中腹、深い谷川を覗く崖に一軒の茶屋がある、茶屋には一人のお神さんがゐる、自分の思出すお神さんといふは實に其人の事である。

時は明治四十年の夏であつた。自分は午過ぎの強烈の目を浴び、瀧なす汗を拭き、此の峠に掛つた。そしてこのお神さんの茶屋へ憩んだのであつた。

お神さんは意地悪の人であつた。貧乏書生はお神さんには有難いお客さんではなかつた。お神さんは可成自分に早く出立せやうとした。そしてウツラ／＼と睡つてゐる自分の側へ子供を故意とガヤ／＼と騒せた。自分はこの狡猾にして不親切なお神さんの仕打ちを何様に厭々しく思つたことであらう。だが自分は顔に出さなかつた、そして「少ないけれど」と、二十錢銀貨一つお盆に載せた、お神さんは眼珠をお盆の如くに圓くした。

若松で胃腸を痛めた自分はまた元の道に戻つた。そして復藤峠を掛けた、茶屋のお神さんは相變らず店に客を待つてゐた。自分の姿を見つけるや

「まあお歸りでありますか、先日は洵にありがとうございました……」

と下へも置かぬ如才なき振り。二十錢の徳も亦大いしたものである。

自分は冷されてあるラムネも飲んだ。西瓜も喰べた。菓子も頬張つた。草鞋も穿き換へた。少くとも二十錢以上の散財である。自分はお神さんが一寸臺所の方へ立たうとするを見

「お神さんこれ茶代だよ」

と五厘銅貨一個お盆に投げつけて脇目も振らず峠をス／＼と駈けた、後の方に「オーイオーイ」

とお神さんの聲。自分は振向きもせず走つた。

漸く峠を下りた時には洋服は汗で搾らるゝ位。自分は小さき微笑を浮べて藤峠を見上げた。峠には入道雲がモロ／＼と湧いてゐた。



◇支倉常長と林子平の墓

二人の墓は共に仙臺は北陵、光明寺と龍雲院とにある。常長は彼の氣宇遠大、風骨稜々の伊達政宗の臣で、世は元和偃武漸く矛を忘れて泰平の夢に耽りやうといふ時代に羅馬へ使したのであつた。羅馬の文明に眩惑させられた常長の報告は、政宗の圖南の志を挫かせたかば知れぬが、今より三百年前の彼の時代に一隻の船に帆を孕ませて森漫涯しない太平大西の二洋を横断したといふ事は、確に常長の人物の偉大を語るものと言はればならぬ。子平は幕末の志士である、經世の志を抱いて三國通覽や海國兵談を著して、大いに時人の睡を覺まさうと企てた。其世界の大勢に着眼したところは政宗、常長と軌を一にしてゐる。

常長の墓は苔錆びてゐた、蕨が周圍の石垣に絡んでゐた、芝草が一面に敷かれてゐた、英雄死しても事業は亡びぬ、彼死して三百年、彼のこの墓標の前に立つた自分は感慨自ら堪へざるものがあつた。

子平の墓は殺風景のものであつた、鐵の柵が嚴めしく廻はされてあつた、喜捨箱が其側に掛けられてあつた、彼の徳を頌して石碑は牢屋みたいの小屋の中に据ゑられて、外よりは折角の其文字さへ讀むことが出来ぬやらになつてゐた。ペンキ塗のベンチが其近邊に設けられてあつた。自分は龍雲主院の無趣味を遺憾に思つたと同時に、地下の子平が氣の毒でならなかつた。子平は死んでまで罪人扱である。

二人の墓は十町と隔つて居らぬ、一は日本最初の洋行者、一は日本最初の西洋通、二人は嘸地下に今の世の薄ッペラのハイカラを笑つてゐることであらう。



大正六年十一月十三日印刷  
大正六年十一月十七日發行

定價金參拾錢

郵稅四錢

著者

中野城水

新潟縣長岡市東神田町三〇番地

發行印刷人

山崎正壽郎

全縣全市上中島町六番地

印刷所

合資社 越佐新報社

全縣全市神田一ノ町五三番地

蕎麥料理  
日本料理  
支那料理  
西洋料理  
鰻料理  
井物料理  
鍋物料理

(御進物用)  
一等金牌長生殿  
箱詰入ビスケット  
箱入干蕎麥  
箱入ひや麥  
箱入干饅飽  
官製煙草類

岡長

角彌本店

電話一五〇番 八八〇番



第五回内國勸業博覽會賞牌受領  
第一回日本文具教育品博覽會名譽賞牌受領

筆墨製造 松 山 堂

品質純良、官衙、學校、會社、商社高評  
全國到る處に取次販賣所あり

電話 五 番  
振替(東京六五番  
口座(大坂三二四番



278  
1/107



終

